程乃珊の教師像

福地桂子

一

程乃珊の小説で最初に評価された《藍屋》（〈鍾山〉1883年 4期）を読んで以来、《窮街》（〈小説家〉1994年 2期）、《女児経》（〈文匯月刊〉1885年3期）、《当我们不再年軽的時候》（〈文匯月刊〉1886年12期）と年を追って、各年の比較的評価されている中編を一作ずつ選んで読んでみた。《藍屋》を読んだとき、程乃珊が最も書きたい題材は、自分の出身である民族資本家及びその子孫たちの生きざまかと思ったが、この四作を読んで、程乃珊は教師という職業に誇りを持ち、自身が約二〇年間勤めた中学教師を描くことにも精力を傾けていることがわかった。この四作のすべてに教師が主要人物として登場する。

二

《藍屋》は民族資本家の三代目である解放後世代の顧伝輝（男）が主人公ではあるが、伝輝の父鴻飛について最も紙数を割いて描いている。鴻飛は解放前、大資産家の家庭に育ち高い教養を身につけている。しかし企業の発展しか頭にない父とは相いれず家を出た。そして、中学教師として教育に打ち込み多くの人材を育てた。経済的には恵まれなかったが、教育者としての自分の半生に誇りを持ち精神的に豊かな日々を送っている。筆者は《藍屋》について書いたとき（注1）、鴻飛を民族資本家の二代目という側面でしか注目しなかったが、程乃珊は鴻飛を理想的な教師像としても描いていたのだ。

《女児経》は解放前の上海の名門女学校出身の気位の高い母親とその三人の娘たちが主要人物であるが、次女の瓊が中学教師である。その教員生活についてはあまり書かれていないが、仕事をやりつつ下放時代の空白を取り戻すため夜間大学に通う努力家であり、公開授業を引き受けるなど、積極的に困難な仕事にぶつかって自分を高めようとする向上心の強い教師である。瓊が下放先で

知り合った恋人は、文革後、親の資産がもどって裕福になったので、家族をあげて彼女の幸運を喜ぶが、瓊は彼が大学進学をあきらめ、商売に熱を入れているのが不満で別れてしまう。

以上紹介したように、鴻飛と瓊は共通点が多い。二人とも出身家庭がよく、教養があるが、青春期に、中国解放、あるいは文革といった中国の大動乱を経験した。しかし、逆境に押しつぶされることなく人生に真摯に立ち向かい、教育という仕事に真剣に取り組む立派な教師である。また経済的に無欲な点も共通している。この二作は教育現場はほとんど描かれていないし、性格描写も厚みがないが、これは大資産家の家に生まれながら、過去の豊かな生活への未練を断ち切り、新しい社会主義中国の教師として、人生に立ち向かっていった作者の理想像であったと思われる。

《窮街》は舞台が中学そのもので、学校を出るとすぐに下町の中学校に赴任してきた女教師文習綉の奮闘記である。作中の中学生が引き起こす様々な出来事は、筆者自身の高校教師体験とも重なって面白かったので、「浩光中学の新任女教師」と題して紹介した。（注2）

主人公文習綉は高級住宅街に住んでいるお嬢さんで、同じ上海に、足を踏み入れるのさえためらわれるようなこんなきたない町があったとはまったく知らなかった。最初、腕白な中学生に振り回され、条件のいい中央の中学へ転勤したいと逃げ腰で仕事をしていたが、同僚の助けもあって、最後には苦労の多い下町の中学の教師として生きていこうと決意する。また、見合いした相手は学歴が高く将来を嘱望されているし、経済的にも恵まれているし、結婚相手として何不足のない男性であるのに断ることにする。他人から与えられる幸せを唯々諾々と受け取るのではなく、自分の力で人生を切り開いていこうと決意するまでに成長した。

《窮街》には文習綉の同僚としてもう一人の教師張祥麟（男）が登場する。張祥麟は生徒たちの家庭状況まで把握している教育熱心な教師であり、生徒たちを叱るのではなく、じゅんじゅんと諭し聞かすことのできるベテラン教師である。彼もまた、豊かな生活を求めてアメリカ国籍を取った妻に渡米を勧められるが、そのような生き方は受け入れがたく、離婚する。

《窮街》は下町の中学校のできごとが細かく描かれているし、主人公文習綉の成長過程も見ることができる。しかし、その教師像は前の二作とまったく同じで、経済的豊かさより自分の信念に生きる真面目一方のタイプである。

これは程乃珊自身が教師としてめざしてきた道であったであろうが、作者のような出身の人が、教師として文革の困難な時期を生きて、もっと厳しい現実があったであろうに、なぜそれが書かれないのかと、不満に思えた。

翌１９８６年発表の《当我们不再年軽的時候》がこの不満に答えてくれた。この小説には、前述の教師たちとはがらりと違った、教育より個人の出世を第一に考える教師たちが登場し、教育界のどろどろした裏面が描かれている。

三

《当我们不再年軽的時候》は《窮街》の姉妹編ともいえ、同じ浩光中学が舞台である。しかし、《窮街》が教室に照準を合わせ、生徒と担任の関係を軸に、勉強意欲のない下町の子供たちをいかに教育すべきかという教育論が展開されるのに対し、この小説は職員室に照準を合わせ、昇級を願う教員たちの足の引っぱり合いが描かれている。この職員室は生徒不在で、教師個人の様々な思惑が渦巻いている。

この当時、学校現場では解放後の教師不足を補うため、高校卒業後教員養成クラスで一年間だけの速成教育を受けて教職についた“三＋一”学歴（注3）と言われる教員たちの処遇が大きな問題になっていたらしく、この問題を中心にストーリーが展開される。“三＋一”学歴の教員たちは皆

> 教員人材の空白時期にあって、あわただしく校門を押し出され、教壇に立たされた。そして教師が最もやりにくかった十年間は、老中年教員のほとんどが“妖怪変化”、“階級の異端者”として打倒されてしまったにもかかわらず若い教員は入ってこなかったので、浩光中学のすべてが形だけの学歴を与えられた“三＋一”にまかされたではないか。野営訓練や行軍、工場や農村での社会実習、はては卒業生の就職まで担当した。今は大学卒が入ってくるようになった。教員たちも授業時数や仕事量が十分あることを望んだ。教員が余ると具体的な教師個々の能力も見ないで、ただ“三＋一”というだけで切り捨てる。あまりに権勢と利益に走りすぎるではないか。あたかも容色衰えれば用なしではないか。

という不満をいだいているが、学校の指導部は大学卒の新しい教員を採用して、他校に負けない教育成果をあげようとして、容赦なく彼らを犠牲にしていく。すでにある国語教師は会計係にまわされた。かっては共産主義青年団支部書記として力を持っていた教員も、政治科、地理科、歴史科と移らされたあげく、今度は街頭補導科に回されようとしている。

この様な状況下に身を置いた三人のタイプの違った英語教師がこの小説の主要人物である。

翁豪威は四十五歳の男性教師。

> マッカーサー将軍に似たがっしりした体格をしている。横長フレームのコーティング加工をした超薄型の眼鏡は知的雰囲気をかもしだし、その眼鏡の奥には鋭いまなざしがきらめいている。

このようにいささか粋だし、柔軟な思考をするので、学校の指導部には政治的向上心がないとして、よく思われていない。

彼は一年課程の速成教員養成クラスしか出てないが、自分の英語の力に自信を持っている。研修に参加して学歴不足を補わないと早晩教壇を下ろされる恐れがあるが、自分ほどの実力と二十数年の教育経験を持つ者が「大学の卒業証書よりも、進歩のない同僚よりも劣る」と見なされるのはどうしてもがまんできない。

彼は現在の英語教育のあり方に対して、

> すべての模擬試験や区の統一試験は五分の一の進学希望者のためにあり、残りの五分の四の生徒は進学希望者につきあわされて三年間を空費させられいる。あきらかに五分の一を守って五分の四を放棄している。

と批判的である。スパルタ教育にも反対で、授業は楽しく展開しながら生徒の興味を喚起させるべきだと考え、それを実践している。そのような考えをまとめた『中学生の外国語教育について』が、昨日の新聞の［教育論壇］に掲載されたので得意である。

しかし、区の英語の統一試験で、彼のクラスの平均点が区の最下位だったことは、後に教壇を降ろされる理由の一つになる。

郝国華（男）は定年間近の老教師で、長年英語科の主任をしている。しかし、本来専門は生物だったので、英語の実力、英語教育の経験ともに翁豪威よりずっと劣る。特にその発音たるやひどいもので、彼のクラスの生徒の発音は‘long long ago’が‘郎郎太阿古(lang lang tai a gu、著者注）’となっている。それでも、大学卒の学歴があるので研修を受ける必要はない。

彼は詰め込み教育に徹して、区の英語の統一試験において、クラスの平均点が区第一位になる成績をあげた。

彼の最大の関心事は毎年行われる２％の給与調整の対象者になり、定年までに一級教師等級の給与に昇給することだ。彼のクラスが統一試験で好成績をあげたことは、給与調整の対象者に選ばれるうえでおおいにプラス材料になる。しかし、翁豪威の文章が新聞に掲載され評価されていることは、彼の昇級には不安材料だ。英語科主任として、英語教員の勤務状況を報告するポストにある彼は、翁豪威が教材のテープを借りに行ったのに出張とは認めず遅刻扱いにし、翁豪威の教案は雑であるなどとてマイナス材料を報告する。

秦韵佳は翁豪威と同じ四十五歳の女教師。今は指導主事であるが、もともとは英語教師だった。イギリスに留学したことがあり、税関に勤務していた父親の指導で彼女の英語の水準はこの中学随一である。政治的向上心が強く、学生時代は共産主義青年団への入団申請を、社会人になってからは共産党への入党申請を出し続けた。しかし、家庭環境やどんなに質素にしても「広範なプロレタリア大衆とは相いれない無形のものがそなわっている」ことなどが障害になってなかなか認められなかった。それでも「プロテタリア革命の道を歩まん」として必死の努力を続けた。

かって翁豪威に恋心をいだいたこともあったが、支部書記に「あなたのように向上心のある人が、翁豪威のような向上心のない青年とつきあうべきではない」と警告され、「自分の感情を抑えこんだ」。

文革後、情勢が変わり、彼女のこれまでのマイナス要因は逆にプラスに作用する時代になり、二十年間の努力も評価され、これまでどんなに望んでもかなえられなかった入党があっさり認められた。

彼女も速成教員養成クラス出身であるが、

世の中が学歴を問題にするようになると、休職して二年間大学に入った。

しかし、英語は専攻せず教育学部を選んだ。そうして浩光中学の指導主事となった。次期校長になる可能性も極めて高い。

現在の関心事は指導主事として浩光中学の教育成果をあげることで、ピアノ教育を思いつく。

浩光中学のような三流校が、区内の百校余りの中学の中で頭角を現わすには文化娯楽や体育と衛生面で努力するしかない。進学率で生まれ変わろうという考えは非現実なことである。

という理由だが、彼女は子供のころピアノを習っていて中学校の卒業式で『乙女の祈り』を演奏したことがあるほどで、ピアノの腕は浩光中学の音楽教師より上だという自負があり、彼女個人のピアノへの思い入れがこの企画を思い立たせたようだ。

指導主事として初めて迎えた教育実習生に対しても威厳を示したい。三流校とみくびっている様子の彼らに、ふと浩光中学にも立派な教師がいることを誇りたくなった彼女は、実習生を引き連れて翁豪威の授業を参観する。彼の授業展開は楽しく機知に富み、生徒はのびのびした雰囲気の中で授業に集中していた。彼女は授業参観の結果「翁豪威は大学卒ではないが、まちがいなくきわめて優秀な英語教師だ」と認めざるをえなかった。

しかし、彼女も翁豪威の論文が気になっている。

浩光中学の校名が新聞に出たのは浩光中学始まって以来初めてのことだ。残念なことは浩光中学の校名と並んでいる名前が秦韵佳でなく、翁豪威であることだ。もし逆であれば指導主事の任についたばかりの彼女にとって極めて有利な“東風”になったであろうに、……だが彼は党員ではない、……彼の文章はちょっと目立ったとしても、区の上級の指導者の心の中で、彼が彼女の位置に取って代わるはずはない。

とは思うものの

彼をあまり目立たせないために、昨日この文章を読んだとき浮かんだ彼の文章を全校教員に討論させようという考えをひっこめた。

その週の定例会議の主要議題は、秦韵佳のピアノクラブ結成の提案だった。校長に翁豪威の文章についての意見を求められても、彼女は

「この文章は確かに啓発されるところがおおいにあります。しかし、今回受け取った教案で翁豪威の分が最も簡単で最もおざなりな教案でした。一教員として、本職の仕事はいいかげんにして新聞雑誌に文章を発表することに熱心すぎるのは、アルバイトに精を出すことで、あまり奨励すべきことではないようです」

と否定的発言をし、広く関心を持たれている翁豪威の文章はこの学校では無視された。また校長に授業参観の感想を聞かれても、

「もちろんあの時間について言えば、なかなか活気がありましたし、工夫もされていました。しかし、授業効果は劇場効果とは違います。興味と活気に注意するほかに問題はやはり生徒の成績をあげることです」

と偽りの感想を述べる。校長の思惑を察しての発言だった。

さらに翁豪威を英語科からはずして新しく大学卒を採用しようという校長の意見に対しても、彼女は反対しない。今権力を持っている彼女が、かっての恋人翁豪威だけは学歴不足の対象外にするのではないかという周囲の目に対し、身の証を立てるためにも翁豪威を切るしかなかった。

四

以上《当我们不再年軽的時候》では、前の三作と違い、教育を自分の野心の道具としてしかあつかっていない教師たちが登場し現実味がある。しかし、権力を持った女教師の個人的なノスタルジーによる思い付きが幅を聞かせ、実践を踏まえた真面目な英語教育論は無視され、あまつさえその真面目な教員は教壇を追われるとはなんともやりきれない結末である。

秦韵佳は三人の教師の中ではやはり最も主要な人物であるし、《窮街》の文習綉の後身ともとれるのに、あまりに落差が大きいのでもう少し見てみたい。

秦韵佳は幼少のころ自然に身につけた育ちのよさや教養を無理やり押さえ込み、ほんとうに純粋な気持ちで「不撓不屈の精神でプロレタリア革命の道を歩

もう」と努力した。しかし、その努力が党に認められるということは、そのまま出世につながった。そんなつもりでもなかったのにいつのまにか学校の指導者にまで出世している。秦韵佳はふと振り返る。

> 自分でもわからない。幼いころから優しく軟弱だった私が、次々に試練に襲われても断固として自分にうち克ちえたのはなぜだろう。あんなにも苦しく、あんなにもむごい苦痛に耐えて自分を否定し続けたのなぜだろう。その最終目的はいったい何のためなのだろう。

しかし、秦韵佳はいまさら軌道修正ができない。本当の自分を押し殺し、必死に「プロレタリア革命の道を歩もう」と努力している間にゆがめられた秦韵佳の性格について、翁豪威に次のように言わせている。

> 彼女は三つ目仙女のようだ。二つの目が恋に、喜びに酔いしれているときでも、はては休んでいるときでさえも、額の真ん中の第三の目は永遠に見開かれている。

この第三の目がかっては、恋人をあきらめる判断をし、今はほんとうに生徒のことを考えている真の教育者を切り捨てる判断をした。かっては真理に向かって勇敢に突き進んだ彼女だが、今では権力者に変身してしまった。

秦韵佳は教育実習生歓迎パーティで恋人同士くったくなく歌っている実習生を見ながらふと次のような感傷にもひたる。

> 私たちはもはや若くなくなった。すべてが過ぎ去った。青春も、情熱も、あのころの無邪気さ、善良さ、純真さと共に。

この引用文がこの小説の結語になっているし、「もはや若くない」が題名である。あまりに寂しい終わりかたに、この小説をどう読むべきかとまどいを感じるが、一応次のように考えてみた。文革後の社会の激変の中で、純粋にプロリタリア革命を目指していたのに変質してしまっている人々、真理だと思いこんでいた党そのものも変質していることに幻滅して目標を見失っている人々、何の苦労も知らない若者たちに席を譲らねばならなくなって、いったい自分たちの苦労はなんだったのかとくやしい思いをしている人々が大勢いる現実を反

映したかったのではないかと。

この小説で希望が持てるのは翁豪威の存在である。彼は常に自分に正直に生きている。「程乃珊の『青い館』を読む」（注1）でも書いたが、程乃珊は社会主義の道を歩こうと努力する一方、自分のルーツを大事にしている。これからも翁豪威のように自分に正直でありたいという思いを改めてかみしめているのではないだろうか。

注

（注1）：「程乃珊の『青い館』を読む」と題して、「日本中国当代文学研究会会報第9号」（1994年 3月）に紹介

（注2）：「季刊中国1995年春季号」

（注3）：“3＋1”については調査不十分でまだ資料が見つかっていない。ただ『教育年鑑1949～1981』（中国大百科全書出版社1984年）によると、中学教師のうち、大学卒業以上の学歴を持つ者は1953年32.2%、1981年4.2%である。このような状況を改善するため、1980年の「全国師範教育工作会議」において小中校の在職教員の養成方針が出された。

中国作协会员队伍又添新血液

会员总数已达5198人

1995年7月7日　文　芸　報

本报讯 1995年上半年度审批会员工作已结束，全国29个省、市、自治区的176名文学工作者了却夙愿，跨入中国作协会员行列，至此，全国会员总数已达5198人。

作为中国作协书记处的日常工作，发展会员已逐步走向规范化、程序化，严格按会章及一系列发展程序进行，包括个人介绍、省作协推荐，专家咨询、征求意见，集体审议、投票表决等。

年初召开的中国作协工作会议曾把培养青年作家列为重点，此次发展会员对有创作实力并有潜力的青年作家做了倾斜，并请部分省作协进行了重点推荐，审批结果，50余名40岁以下的青年作家获通过，占发展总数近三分之一。书记处和咨询专家们一致认为，此次各省报上来的青年作家，大部分创作路子正，作品质量和数量接近或已达到了中国作协会员标准。

在此次批准的会员中，有女作家26人，少数民族作家23人，其中有云南阿昌族作家罗汉，这使作协会员队伍又增加了一个少数民族。

书记处在审批新会员的会上还做出决定，所有书记处书记在任职期间不再做申请入会者的介绍人。

（孙德金）